いばきた

デザイン
プロジェクト

IBA-KITA
DESIGN
PROJECT

2019/4 —— 2020/3

茨木市北部地域・旧清溪村 編

茨木市

茨木市 都市整備部 北部整備推進課

〒567-8505 茨木市駅前三丁目8-13
電話：072（620）1609
ファックス：072（620）1730
メール：hokubuseibi@city.ibaraki.lg.jp

次なる
茨木へ。

茨木市北部地域の課題解決を目指して。

茨木市は、大阪市や京都市へアクセスしやすく、大学・高校をはじめとする教育機関、ショッピングモール、商店街、飲食店などの商業施設も充実していることから、関西圏の中でも「住みよいまち」「利便性の高いベッドタウン」として評価が高く、茨木市全体の人口推移は毎年増加傾向にあります。一方、北部山間地では、若者を中心とする人口流出と農林業従事者の高齢化により、産業や環境保全の停滞が続いています。特に問題となっているのが、山間地の「深刻な過疎化」です。茨木市の全面積の約半分が山間地にあたりますが、市街地の人口に対して約1%という統計もあります。

いばきたデザインプロジェクトでは、このような課題解決に向けて、地元で暮らしている方々をはじめ、市内外のさまざまな人たちが北部地域に関心を持ち、みんなで考え、一緒に取り組んでいくことができるフィールドを創出していきます。

課題解決に向けた「仕組み」をデザインする。

プロジェクトチーム

大学、専門識者、クリエイターをはじめ、
地元地域の方々や北部地域で活動する
団体と連携を深め、協働の体制をつくる

北部地域と密接につながり
フィールドワーク、取材、編集などの活動を行う

活動を通じてプロジェクトの「仲間」をつくっていく

↓

課題解決に向けて
みんなで意見やアイデアを出し合える「場」をつくる

- 地域課題の「見える化」を行い、みんなで共有する
- 歴史、文化をはじめ、自然環境、人々の暮らしなど地域資源や魅力を再発掘していく
- 北部地域の未来図を一緒につくっていく

過程と成果を
情報発信 <> 情報共有

北部地域で
暮らしている方々

市内外で
活動している方々

茨木市北部地域は、地元の人たちから親しみを込めて「山三」と呼ばれています。

1889年（明治22年）に施行された町村制により、島下郡の大岩村・安元村・生保村・大門寺村・桑原村を「石河村」。下音羽村・上音羽村・銭原村・長谷村・清坂（現在は清阪）村・車作村・忍頂寺村を「見山村」。泉原村・千提寺村・高山村・佐保村を「清溪村」として発足し、旧村域は大字となった。1896年（明治29年）には所属郡が三島郡となり、その後、1955年（昭和30年）に茨木市へ編入。同時に三島郡 石河村・見山村・清溪村は廃止されました（その際に清溪村の大字高山が豊能郡東能勢村＝現豊能町に編入）。地元の方たちは、現在もこの旧石河村・旧見山村・旧清溪村の３つの旧村域で区分をし、親しみを込めて「山三」と総称しています。いばきたデザインプロジェクトでは、2018～2020年度の３年間をかけて１年間で１旧村域を対象に、「山三」をフィールドにした、さまざまな取組みを推進させていきます。

いばきたデザインプロジェクトは、2018～2020年度の３年間を実践期間としており、期末ごとに冊子を発行します。本冊子は2019年度版にあたり、旧清溪村地域を対象とした活動の過程や成果を活動順に編集したものです。

大阪大学大学院 工学研究科の学生と、一緒になって取り組むプロジェクト。

いばきたデザインプロジェクトでは、大阪大学大学院工学研究科 環境・エネルギー工学専攻都市環境デザイン学領域の学生と連携を図り、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、地域の空間的・社会的な特性を把握するためのデータベースづくり、地元の方々の協力によるフィールドワークなどを継続的に行っています。活動を通じて得られた情報は「集落カルテ」にアップデートし、課題解決に向けての方法を導くための情報ツールとして活用していきます。

大阪大学大学院 工学研究科の学生による取組み

地域資源の抽出と集落の空間的・社会的特性を把握

文献資料調査 / ヒアリング調査 / 現地調査

↓

データベースの作成

15集落の特徴、多様性を検証

↓

集落カルテ

人口や面積、土地利用、歴史的背景、活動組織、地域資源などの情報を集落単位でまとめ、カルテ化する

地域資源の分布 / 資源と人々との関係 / 地域住民の想い・考え

集落の課題や地域資源の関連性を視覚化し、読み解いていく

集落のストーリーを再編集する

↓

地域資源のつながりを活かした「集落デザイン」を検討

- **集落の現状と課題**：地域課題や現状を把握する
- **資源**：資源を総合的に把握しそれらが総体となって形成する価値を見出す
- **ターゲット**：地域資源やそのつながりを踏まえたマーケティング

↓

コンテンツ創出

常連人口として課題解決に貢献できるコンテンツを展開

［必ずしも多くはないが、深く関わり愛着を持ってくれるターゲットに対応したコンテンツを各集落で創出する］

常連人口を獲得し、地域に変化をもたらすアクション

⇕

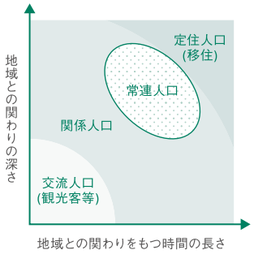
いばきたデザインプロジェクトと連携

つむぎあげる集落のストーリー。

地域資源や魅力、歴史や文化、環境、暮らし方などの情報を「集落カルテ」にまとめ、将来のまちづくりのポイントを読み解いていきます。さらに、地元の方々の想い・考えや市内外の人たちのアイデア、行政のミッションと重ね合わせて、地域の新たなまちづくりのストーリーを再編集し、ひいては新しい価値創出へとつなげていきます。

集落に「常連」という関わりを。

地域との関わりが密であり、地域の課題解決や地域資源の保全・活用に貢献できるような地域外の人々を戦略的に獲得していくことが集落の持続性を支える手段であると考えています。このような関係人口の中でも、より深く、より長く地域と関わりを持つ人を「常連人口」と定義し、その獲得を図るためのプランニングを行っていきます。



大阪大学大学院 工学研究科　学生スタッフ：新井 崇史 / 岡田 早彩 / 高尾 尚宏 / 鈴木 亜未子 / 西端 佑騎 / 松岡 貴大 / 小池 のどか / 河 亨析　　指導・監修：松本 邦彦（助教）

泉原

［いずはら］

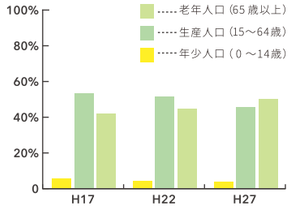
広大で美しい山々と見事な棚田が織り成す「里山の原風景」に出会う。

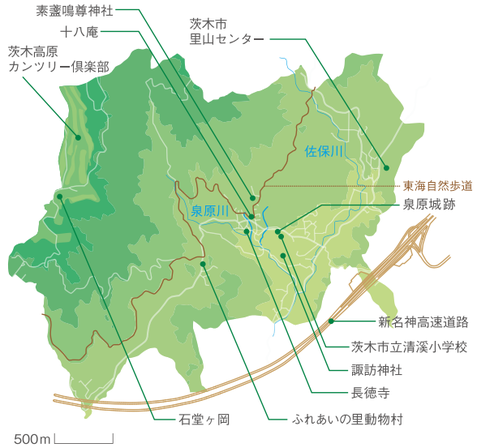
茨木市の北西に位置しており、面積の大半を奥深い山間地が占めている。東部に佐保川が流れており、その流域には、棚田をはじめとする耕地が多く、美しい里山の風景を織り成している。集落は、泉原川から中央部にかけて連なっており、ここに、旧清溪村を校区とする「茨木市立清溪小学校」がある。また、北西に「茨木高原カンツリー倶楽部」、北東には、森林ボランティアの活動拠点「茨木市里山センター」がある。

集落の基本情報

人口	862人（男:439人、女:423人）
世帯数	156戸
面積	約6.7㎢

年齢別人口割合の推移





泉原自治会
会長

西谷 博嗣さん

地区・地域・行政が一体となった課題解決への「包括的な計画立案」が必須。

北部地域では、少子高齢化に伴う農林業従事者の担い手不足、子どもたちの教育、老人の介護など、社会的な問題を抱えており、「地域の営み」存続に係わる課題と認識しています。このような課題に対しては、自治会や域内諸団体が中心となって努力を尽くしていますが、個人や地域の単体活動だけでは、抜本的な解決に至ることは困難です。解決のためには、地区・地域・行政が一体となって、各課題を徹底的に「可視化」し、議論を重ね、役割を明確にする。その上で、包括的な計画立案、実効性のある組織形成に取り組まなければなりません。泉原地区では、遊休農地や台風被害で倒木散乱の森林が目立っています。重要な「地域資源」を次世代に引き継ぐためにも、これらの本来の「機能」を回復させるとともに景観や楽しみ方などの「活用」についても、みんなでアイデアや意見を出し合う「老若男女参加型」の活動にしたい。併せて、「やりがい」や「郷土愛」などの原動力発掘・強化を図る機会となることを期待しています。実現に向けて、地区・地域・行政間の綿密な課題共有と連携のしくみが重要となりますが、このような事例を新たな知見とし、北部地域の課題解決への糸口につなげていきたいと考えています。

西谷 博嗣（にしたに ひろし）

1949年泉原生まれ。2011年泉原自治会役員に就任、2019年より現職。青健協事業「日本の文化に親しむ清溪剣道」や生産者グループ「泉原ファーマーズ」の発起人メンバーを務めるなど、地域密着で活動中。座右の銘は「温故知新」。

［参照］人口及び世帯数：2015年 国勢調査／面積：2017年 都市計画基礎調査／年齢別人口割合の推移：各年国勢調査

18人の子どもたちを
地域が一緒になって成長を見守る
「茨木市立清溪小学校」。

旧清溪村の泉原、千提寺、佐保を校区とする「茨木市立清溪小学校」。1908年に清溪村立清溪尋常小学校として開校。1955年、清溪村が茨木市に編入されたことを受け、茨木市立清溪小学校に改称。北部地域の課題である少子高齢化、若年層の流出に伴って児童の減少が続き、令和2年現在での全校児童数は、18名となっている。

茨木市立清溪小学校
校長
松井 徹先生

大人と子どもが深い絆でつながり、「地域愛」を大切に育んでいく特別な場所。

私が自己紹介をする機会には「大阪でいちばん小さな学校の校長です」とお応えしています。現在、茨木市立清溪小学校は全校児童18人。北部地域の課題である少子高齢化を象徴的に体現する事例として捉えられています。「この先はどうなるのか」という声も耳にしますが、私自身は、このような現状を、可能な限りポジティブな思考へと転換するように心掛けています。子どもたちと接していて実感することは、自然、地域、家族、学校が本当に大好きだということ。また、その親御さん、保護者のみなさんのほとんどが清溪小学校の卒業生ですから、母校の行末を自分ごととして受けとめ、惜しみなく行動をしていただいています。地域がひとつになって子どもたちを支え、見守り、子どもたちも都会では体験することができない、人と人との深い絆やコミュニケーションを学んでいく。そのようにして「地域愛」を大切に育む特別な場所と言えるのではないでしょうか。このような地域の姿を、子どもたちが「誇り」と感じ、さらに次代を担うキーパーソンへと成長してほしいと思っています。

松井 徹（まつい とおる）
大阪市生まれ。1986年より茨木市内中学校教員などを経て、2018年忍頂寺小学校教頭。2019年より清溪小学校長を務める。

泉原の安全と
伝統や風習を守り、
地域の魅力発信や活性化に
つなげていく。

地元の人々が力を合わせて伝統文化を守り継ぐ「泉原の秋祭り」。子どもたちが太鼓を叩く神輿を引き、豊かで美しい里山を巡る。

泉原の消防団は、災害時の活動をはじめ、自治会との連携を図りながら、祭りや催事などの運営サポートを行い、地域の安全、伝統や風習を支え継承している。

泉原消防団 団長
（清溪分団 部長）
岸本 博さん

地域を守り継いでいくためには、「若い力」が必要不可欠。

消防団員になって21年、泉原の団長に就任して7年が経ちます。消防団の役割は、火災発生時の消火活動、そのための訓練や車両の整備点検をはじめ、催事や祭りの運営サポートなどを行っています。北部地域のようにローカルな土地では、20歳になると、ほぼ自動的に入団し、41歳ぐらいで退団するというのが慣わしですが、少子高齢化による団員数の減少に伴い、平均年齢も高くなっています。地域に若者が少なくなると、産業、教育、介護といった課題が顕著に現れてきますが、私が危惧する点は、地域の活力が失われてしまうということ。「泉原の秋祭り」のように、地域がひとつになって交流する機会を守り継いでいくためには、若い力が不可欠。私は、泉原から茨木の市街地へ勤めに出ていますが、十分に通勤圏内です。北部地域の魅力は、大自然に包まれた里山の暮らしを続けながら、都会へのアクセスが身近であるということ。この独自性が、しっかりと周知されていないと思います。地域を盛り上げ、魅力を発信していくことで、関係人口や定住人口の増加につなげていく。そのために消防団が「やるべきこと」を見出していきたいと考えています。

岸本 博（きしもと ひろし）
1970年生まれ。1990年補助団員として泉原消防団入団、1999年に正団員（茨木市消防団清溪分団）として現在に至る。

千提寺

［せんだいじ］

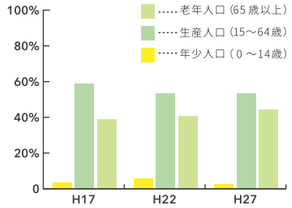
懐かしさと新しさが交わり合って、多様な文化が生まれていく。

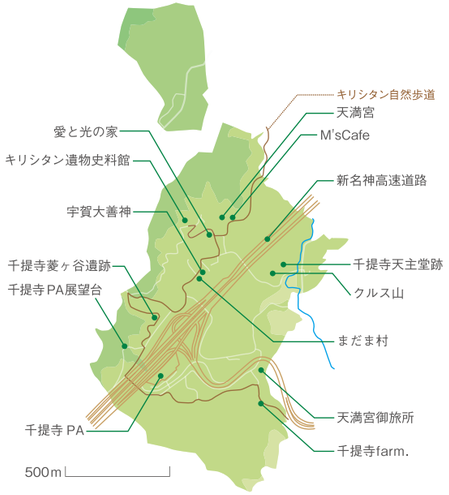
隠れキリシタンの里として知られる千提寺。「茨木市立キリシタン遺物史料館」をはじめ、「千提寺天主堂跡」、「愛と光の家」、「クルス山」など、キリシタンの歴史・文化的資産を数多く有している。同じくキリシタン遺物が残る下音羽へと続く「キリシタン自然歩道」が通っており、市内外からの人たちの散策コースとなっている。2017年に開通した新名神高速道路が、ほぼ中央部を斜めに貫いており、千提寺インターチェンジ・パーキングエリアが位置している。

集落の基本情報

人口	81人（男：31人、女：50人）
世帯数	32戸
面積	約1.3 km²

年齢別人口割合の推移





千提寺自治会
会長

中谷 光さん

独自の地域性を活かして、「新たな価値」を生み出していきたい。

千提寺の地域課題においては、新名神高速道路開通によって変化した自然環境の保全、維持管理の重要性が挙げられます。これについて「茨木市里山センター」をはじめ、森林ボランティア団体「茨木里山を守る会」と綿密に連携し、自治会と地元住民が一体となって活動を進めています。次に、少子高齢化による後継者不足、若年層流出の課題。高齢化が進行することで「買い物や病院に行けない」「農地に出向くことができない」といった、いますぐ解決しなければならない課題が顕在化しています。このことは、北部地域全体が抱える深刻な課題として認識を深め、行政と地域が解決への道筋を早急に導き出していかなければならないと考えています。千提寺は小さな集落ですが、隠れキリシタンの里をはじめ、日本で唯一の三島独活栽培農家、カフェやガラス工房など、文化的な地域資源が集約されている地域。さらに、関係人口や定住人口を増やすことを目指す若い人たちがムーブメントを起こし、積極的にチャレンジを試みています。このような独自性を活かし、未来に向けての「新たな価値創出」に貢献していきたいと思っています。

中谷 光（なかたに ひかる）

千提寺生まれ。2011年千提寺自治会長に就任し、現在に至る。自らも茨木里山を守る会の会員になる等、地域のさまざまな活動に取り組んでいる。

［参照］人口及び世帯数：2015年 国勢調査／面積：2017年 都市計画基礎調査／年齢別人口割合の推移：各年国勢調査

隠れキリシタンの里 千提寺の歴史と文化を伝える「茨木市立キリシタン遺物史料館」。

茨木市における隠れキリシタンの存在は、「上野マリヤ」銘墓碑が見つかったことを端緒とし、大正９年９月、東家において「あけずの櫃」が開封され、数多くの遺物が発見されたことによって明らかになった。このことは新聞等で大きく報じられ、当時の千提寺には、研究者、キリスト教関係者、記者などが数多く押し寄せた。遺物は約70点におよび、「マリア十五玄義図」「キリスト磔刑像」「キリシタン墓碑」などの貴重な歴史・文化的資産が「茨木市立キリシタン遺物史料館」にて紹介されている。教科書でよく知られている「聖フランシスコ・ザビエル像」も千提寺で発見され、昭和10年に池長孟氏の所蔵となり、のちに南蛮堂コレクションのひとつとして神戸市立博物館蔵となって現在に至る。

茨木市立キリシタン遺物史料館

中谷 早苗さん

里山の暮らしを楽しむことが、次世代のチャレンジにつながってほしい。

私にとって、千提寺の里山は「宝物」です。少し山林に踏み入れると季節の美味しい山菜が採れ、近所のお年寄りの方々から教わった手料理をはじめ、お味噌やおかきをつくったり、農業用の籠やわらじづくりなどの手仕事をしたり。毎日の暮らしの中に楽しいことが、いっぱいあるんです。キリシタン遺物史料館で働いていることも同じ。地域の貴重な資源を遠方から来られる方々にご案内しながら、たくさんの人々との出会いや交流の機会をいただいています。歴史や宗教に関わる大切な仕事なので、奥が深く、膨大な知識が要求されます。日々、勉強と気づきの連続ですが、そのことで、地元の風土や文化など、自分たちが住む土地の独自性を、あらためて実感することができます。千提寺には、地域の活性化を目指して積極的に活動する若い人たちが多く、全力でサポートしていきたい。一方、私たちの世代は、先人の方々が残してくれた、豊かな自然、暮らしの知恵、人々のつながりを、しっかりと守り継ぎ、未来に伝えていくことが役割。そのためにも、地域の魅力や楽しさを、もっともっと見出していきたいと思っています。

中谷 早苗（なかたに さなえ）

兵庫県生まれ。昭和53年に千提寺に嫁ぐ。専業主婦の傍ら、勿体ない精神と自然が好きで、竹炭を焼いたり、蔓かごを作ったり、山野草料理を作ったりして里山の暮らしを満喫。キリシタン遺物史料館には、平成10年より勤務している。

「三島独活（うど）」の伝統を継承すること、未来を見据えた持続可能な循環型社会を生み出すこと。

代々続く三島独活の栽培農家は、全国でも千提寺farm.一軒のみとなった。2015年から最後の農家を引き継ぎ、伝統農法を継承しながら栽培を続けている。小屋に藁と干し草を7層積み、発酵させることで熱をつくり、独活に春だと思わせて育てる。栽培には非常に手間暇がかかり、発酵技術に長年の経験が必要とされる。収穫時まで外気に触れさせないので、一般的な独活と全く異なり、アクがなく、強い香りとみずみずしい味わい。「なにわの伝統野菜」に認定され、多くの人々から愛される一品となっている。

中井さんたちが中心となって設立した「一般社団法人みずとわ」。コミュニティ事業では、循環型の地域づくりに向けて、多分野の人たちが集い、交流し、さまざまなチャレンジを実践する「場」の形成。カルチャー事業は、企業や団体と連携し、次世代の働き方や人材育成に取り組む。エネルギー事業は、限りある資源を再活用し、最新のテクノロジーを駆使した再生可能エネルギーの開発を目指す。持続可能な社会システムを構築し、ローカルが抱える課題解決への先進事例を導き出していく。

千提寺farm.

中井 大介さん・優紀さん

新しい地域社会を築くためには、「人のつながり」が重要なファクターとなる。

三島独活の栽培を引き継ぎ、初収穫の際に「独りじゃ、活きられへん」という言葉が湧き上がってきました。伝統農法を継承する人、地域の人、応援してくれる人。さまざまな人々に支えられ、寄り添い、手間暇をかけて育まれる三島独活から、人のつながりの大切さを教えてもらっています。地域の課題解決においても同じことが言えます。現在、私たちは「一般社団法人みずとわ」を設立し、持続可能な社会の実現を目指して事業をスタートさせました。千提寺の古民家を再生させ、コミュニティ形成の拠点をつくり、食・人・環境・エネルギー・経済が循環する、新しい地域づくりに向けて、共感する多様な分野の人たちが集結しています。それぞれの知見やノウハウを活かし、シェアしながら、共に考え行動していく大切なパートナーたちです。時代は目まぐるしく変貌しています。発展や成長といったモデルが淘汰され、循環型社会システムへの移行が余儀なくされています。北部地域のように課題が顕在化された小さな地域だからこそトライする価値があり、先進事例につながっていくと確信しています。みんなと一緒になって未来を描き、さらに前進を続けていきます。

中井 大介・中井 優紀（なかい だいすけ・なかい ゆうき）

大介は千提寺、優紀は山手台出身。2015年に脱サラし、三島独活農家になる。また、2015年に、茨木ほくちの会、2019年に、一般社団法人みずとわを設立し、持続可能な地域づくりを目指して活動中。

佐保

［さほ］

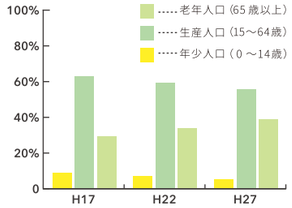
開発が進む「彩都」から一歩踏み入れると、いばきたの里山景観が広がる。

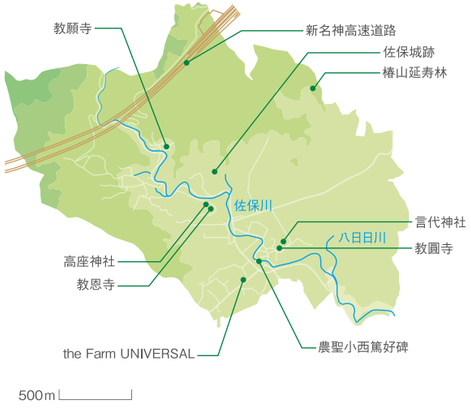
佐保川の上流域に位置しており、集落は、川沿いの高台地と谷合いの川筋に沿って北側に分布する。南部は、大阪モノレール彩都西駅をはじめ、高層マンションや商業施設が立ち並び、開発された彩都西部地区に隣接。2015年に佐保彩都あかね線を通る彩都西部地区からの新たなルートができるなど、茨木市北部地域のなかでも市街地に近いロケーションである。

集落の基本情報

人口	361人（男:188人、女:173人）
世帯数	136戸
面積	約3.9 ㎢

年齢別人口割合の推移





佐保自治会
会長

速水 清さん

新しい考え方を柔軟に取り入れ、「やり遂げる」という強い意志を持ち続ける。

地域づくりにおいて、私が最も大切にしていることは「実行性」。どんなに立派で斬新な理論があったとしても、行動が伴っていなければ現状を突破することはできないですね。もちろん、情報を集約し、アイデアを積み重ね、計画化していくことを怠ってはいけません。しかし、「本当にやり遂げる」という強い意志を持ち続けることこそが重要だと思っています。有り難いことに、佐保には課題解決に向けて積極的に行動できる「仲間たち」が揃っています。先人の方々が残してくれた文化や風習を継承しつつ、新しい考え方を取り入れ、しくみを変え、チャレンジをしていく。そうした実践の中から、みんなで地域のあるべき姿を描き出していきたい。さらに、次のミッションとしては、私たちの意志を受け継いでくれる後継者を増やしていくこと。地元で暮らす人に限らず、市外からでも週末だけでも、佐保で「やりがい」を見つけることができるのであれば、どんどん入ってきてほしい。そのために、もっとたくさんの人たちと出会い、交流を深め、双方が刺激し合いながら、一緒になって未来を築いていきたいと考えています。

速水 清（はやみ きよし）

昭和20年佐保生まれ。平成15年から平成25年まで松谷実行組合長を経て、平成25年から佐保自治会長を務め現在に至る。

［参照］人口及び世帯数：2015年 国勢調査／面積：2017年 都市計画基礎調査／年齢別人口割合の推移：各年国勢調査

他の地域で暮らしながら
休耕地を活用して農業を営む
課題解決に向けての新たなアプローチ。

箕面市に暮らし、自営業を経営する南谷幹雄さん。「ビジネスとして成立する農業をはじめたい」という強い思いから、北摂中の自治体に相談をするが、法律をはじめ、多岐にわたる障壁によって実現を阻まれる。そこで出会った地が佐保。担い手不足の農家が抱える休耕地の課題と、新規就農者が持つ課題をwin-winの関係でマッチングさせた。「土地を荒らさない」「持続可能な農業を営む」「地域との交流を大切にする」など、南谷さん自身が設けたルールに基づき、地元に溶け込んだ農業を実践する。そこで培われたノウハウを活かし、農地や人材、設備、流通のシェアといった、双方の課題解決に向けた新たなアプローチ手法を提案している。

アグリファーム佐保

南谷 幹雄さん

農業での成功事例をつくることで、「地域づくり」につなげていきたい。

「農業で成功者になる」というのが、私の人生目標です。本業の傍らに休耕地を借り、わずか三年間の農業経験ですから、かなり挑発的な発言と捉えられるかもしれませんが、本気で実現できると確信しています。現在の農業従事者を取り巻く環境は、法律、市場、土地、人材をはじめとする課題がネガティブに顕在化し、存続が厳しい状況です。しかし、一方では、利益を担保し、着実に産業として成立させている農家もたくさんあります。その違いは「明確な経営ビジョンと計画性」。適正な生産管理と効率化、それにともなう設備投資、市場の開拓など、成長を見据えたビジネスモデルを構築し実践することです。私のような他所者を受け入れてくれた佐保の方々には心から感謝しています。その恩に報いるためにも、まずは、自分自身が成功事例になる。そして、蓄えた知見やノウハウを惜しみなく地域に還元していく。さらに、地元農家の後継者、他所から農業をはじめたいという若者たちとチームをつくり「農業経営のシェア」も進めていきたい。それらが地域の課題解決、活性化につなげていくための「原動力」になれば、うれしいですね。

南谷 幹雄（みなみたに みきお）
茨木市出身。滋賀県で内装仕上工事業を営む傍ら佐保の農業従事者チーム「アグリファーム佐保」の一員として農業に携わる。

自然を愛する心から生まれ、
数千本の椿と四季の草木が咲き誇った
かつての「椿山延寿林（つばきやま えんじゅりん）」に想いを馳せる。

佐保の北東部に位置する「椿山延寿林」。故岡田種雄氏が育てた1000種、数千本の椿をはじめ、四季の草花が咲き誇る別天地があった。約50年前、大阪万博事業に伴って新御堂筋工事が行われる際に、樹齢70年の白玉椿が数百本伐採されることとなり、「これは切ってはいけない」と、種雄氏は1本1本運んで、自らの所有する山へ移植することに。以来、自らの手で緑と花に包まれた場所づくりを決意する。椿山延寿林には、明かりもない東屋や茶室などがあり、訪れる多くの人たちと、趣向を凝らした食事を楽しみ、自然への想いを語り合うコミュニティであった。現在、種雄氏が亡くなられたことから山は休眠しており、当時を知る人々からの復活を望む声も多い。

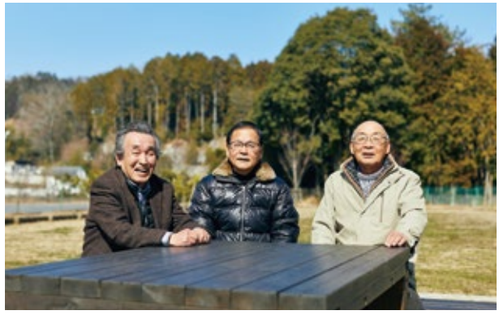
椿山延寿林の岡田家

岡田 憲明さん

「椿山延寿林」に込められた命題を課題解決への糸口にする。

20年間、茨木市の職員として市街地で勤務し、佐保の地から通い続けています。わずか2、30分の通勤距離で、豊かな自然に包まれた里山の暮らしを営むことができる。このような優位性が、多くの人々に周知されていないですね。少子高齢化や若年層の流出など、さまざまな課題が顕在化していますが、恵まれた風土、固有の文化を大切に育み、仲間たちと一緒になって地域づくりに取り組むことで、解決への糸口を見出すことができると思っています。祖父が築き上げた「椿山延寿林」には、そのための命題が凝縮されています。自然を愛し、もてなす心。そして、信念と情熱を持って成し遂げる実行力。その磁力に導かれて、たくさんの人たちが佐保に訪れてくれました。残念ながら、現在、山は休眠していますが、祖父の偉業を受け継いでいきたい。私一人では困難ですが、復活を望み、賛同していただける方々にアドバイスをいただきながら、何年かかってでも、一歩一歩着実に実現へと向かっていく。そのような想いが、地域を担う次世代にとっての「力」につながっていくことを願っています。

岡田 憲明（おかだ かずあき）
佐保生まれ。幼少の頃から祖父・種雄氏について椿山延寿林に親しむ。市では若園公園バラ園の管理に携わる。消防団やPTAなど地域活動にも積極的に参加。

行政と地元の方々との連携、多分野の人たちとの協働を推進させ、みんなと一緒に課題解決へと向かっていきたい。

茨木市北部地域の課題解決に向けた取組みを円滑に推進させ、着実に成果へとつなげていくためには、地元で暮らす方々と行政との親密な連携や、地域づくりに関心の高い多分野の人たちとの協働の体制づくりが重要です。いばきたデザインプロジェクトでは、これらの三者が、しっかりとチームを組み、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、フィールドワークによるデータベース化、情報の可視化と発信、ネットワーク構築を行っていきます。そのプロセスで得られたノウハウを最大限に活かし、さまざまな人たちが使いこなすことができる「新しい仕組み」をデザインしていくことを目的としています。さらに、プロジェクトの活動が市内外の多くの方々に伝わり「参加することが楽しい！」「関係を持つことが楽しい！」と感じていただけるフィールドづくりを実践し、活動人口の拡大に寄与していきたいと考えています。